

家電メーカーに勤める中堅社員のAさんは、与えられた仕事を粘り強くコツコツと行なってきた姿勢が評価され、新製品PRのプロジェクトリーダーに抜擢されました。しばらく経って、Aさんが担当する新製品を購入したいとの商談が舞い込んできました。先方は長年、自社と取引していた会社です。Aさんは何としても、商談を成功させようと意気込んでいました。

新製品のプレゼンテーション資料を何通りか用意するために、連日、必死になって準備してきました。夜遅くまで、根詰めて仕事をするAさんの姿に、チームのメンバーが不安になるほどでした。

ある日、いつものように夜遅くまで作業を進めていると、Aさんの体に異変が起きました。左足の太ももに痛みが走り、皮膚にはうっすらと発疹が出ていたのです。

当初は気にもせず、作業を続けていましたが、痛みは治まるどころか日が経つにつれ、ひどくなっていきました。

Aさんが時折、顔を歪めながら資料を作成しているため、周囲は心配して病院に行くことを勧めるほどでした。

しかしAさんは、商談が数日後に迫っていることと、「新製品の一番の理解者は自分だ」という自負がありました。また、病気が原因で担当を外されることを嫌って、病院に行くことを頑なに拒否したのでした。

商談当日、Aさんの痛みは限界に達していました。額に汗を滲ませ、足を引きずりながら歩いているAさんの姿を見て、上司



肉体が教えてくれた 心意の不自然さを見つめ直す

はすぐに病院に行くよう命じたのでした。この時ばかりはAさんも観念しました。これ以上、自分がかかわったら、チームの士気に影響するばかりか、先方にも不信感を与えたいと思ひ、病院へ直行したのでした。診断の結果は、ウイルス性の疾患で、今すぐに入院を要することでした。

その後、商談は、チームの一人ひとりが与えられた仕事を見事に担ったことで、無事に成功することが出来たのです。

後日、その連絡を受けたAさんは、ホッと胸に手を当てるとともに、(人の話に耳を傾けず、周囲に一層迷惑かけたこと) (周囲を信頼し切れず、自分で何でも抱え込んでしまう頑固者であったこと) など、自身の振る舞いを猛省したのでした。

純粹倫理では、生活の不自然さや心の歪みが映った際に、それを「赤信号」として苦難や病気が現れていると考えます。そして、その解決方法の一つとして、心の在り方・生活の処し方を大切にしているのです。

朗らかなゆたかなうるおいのある心になれば、肉体は、自然に、すぐに、直つてしまふものである。(『万人幸福の葉』第七条)

退院後、Aさんが再びチームに戻ると皆、快く笑顔で迎え入れてくれました。心を入れ替えたAさんは、メンバーの笑顔に呼応するように、その後の態度、人との接し方、言葉遣いが変わり、今ではチーム一丸となって、新たなプロジェクトに挑んでいます。